

自己の意識における地域の把握の試み

東北工業大学	学生会員	○高橋	由弥
東北工業大学	正会員	泊	尚志
東北工業大学大学院	学生会員	近石	さゆり
東北工業大学	学生会員	齋藤	和希

1. はじめに

わが国では、地方の過疎化問題や東京一極集中が問題視されている。そういった問題を解決するために地方創生やU・Iターン推進を目的とした取り組みが様々な地域で行われている。それに伴い、地元意識の研究や調査が行われている。^{1) 2)}

いずれの調査も自己と結びつきの強い地域が「地元」と表されているが、これでは聞かれた相手によって対象地域の選択に作用してしまう。自分が想像した自己と結びつきの強い地域を相手に伝わりやすいように言い換えて答えてしまい、本来感じている自己と結びつきの強い地域とは違った答えになってしまうと考える。

そこで、本研究では匿名のアンケート調査に基づいて、聞き手の情報に左右されない自己と結びつきの強い地域、すなわち自己の意識における地域の把握を目的とする。

2. 調査概要

自己の意識における地域の把握をするために、本研究では匿名での調査アンケートを実施した。調査対象は全国の20歳以上の男女とした。

本調査では、回答者の属性のほか、自己の意識における地域を「自分を最もよく表す地域」としてその地域の広がりや質を問う、そのあと自己の意識における地域を「自分を最もよく表す地域」として自由記述してもらった。また、その地域を選んだ要因を1) 生まれ育った場所だから、2) 自分にとって思い出深い場所だから、3) 家族や親族がいる場所だから、4) 友人がいる場所だから、5) 現在住んでいる場所だから、6) お墓がある場所だから、7) その他(自由記述)から複数回答を許容し選択してもらった。他には、地域との心理的な結びつき、地域に対する理解の主体性と地域に対する理解の認識、地域に対する印象等を調査項目として設定した。

調査の実施には、WEB調査会社によって2022年1月18日から同21日にかけて回収した。回収数は1097件(人)であった。

調査では、自己の意識における地域を「あなたのことを最もよく表す地域」と定義した。

3. 調査結果・考察

はじめに、自分を最もよく表す地域の広がりを聞いたところ「市区町村」という回答割合が最も多く、「都道府県」がこれに続いた(図-1)。この回答とその地域の居住年数についてクロス集計を行った結果、その地域での居住年数が増加するごとに自己の意識における地域の広がりを「市区町村」で考える人が多くなる傾向がみられた(図-2)。

また、自分を最もよく表す地域を選んだ要因として「現在住んでいる場所だから」の回答割合が最も多く、「生まれ育った場所だから」がこれに続いた(図-3)。この回答と年代についてクロス集計を行ったところ、年代が上がるにつれて「現在住んでいる場所だから」と「お墓がある場所だから」の回答割合の増加傾向がみられた(図-4)。さらに、自分を最もよく表す地域を選んだ要因と転居回数でクロス集計をしたところ、今まで転居したことがない人は「生まれ育った場所だから」を回答する割合が一番多いのに対して、転居をしたことがある人は「現在住んでいる場所だから」「生まれ育った場所だから」を多く回答する傾向がみられ、転居回数が増えるにつれ、「現在住んでいる場所だから」の回答割合は増加傾向にあることが分かった(図-5)。

キーワード 自己の意識 地域 アンケート調査

連絡先 〒982-8577 宮城県仙台市太白区八木山香澄町35番1号、電話 022-305-3533



図-1 自己の意識における地域の広がり

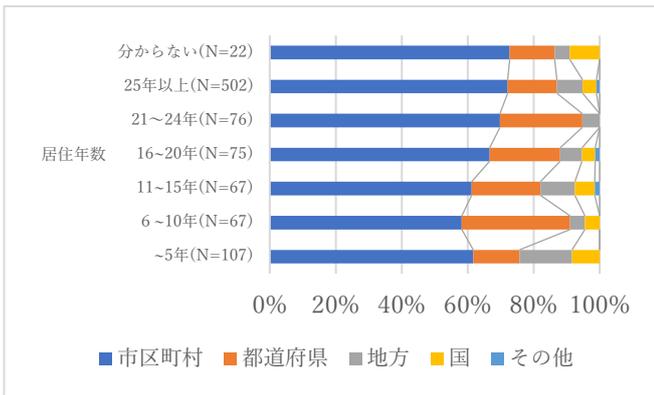


図-2 居住年数別でみる自己の意識における地域の広がり

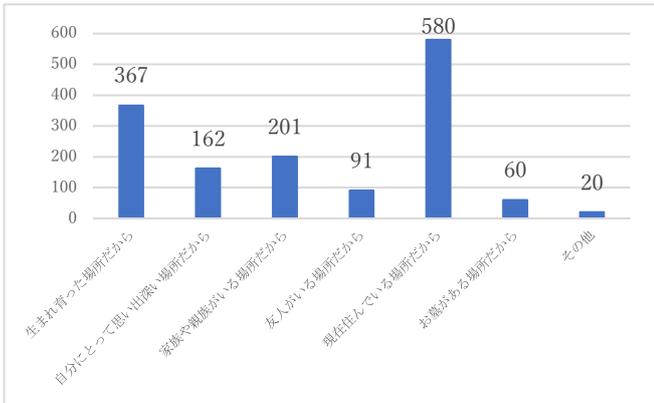


図-3 その地域を選んだ要因（複数回答あり）

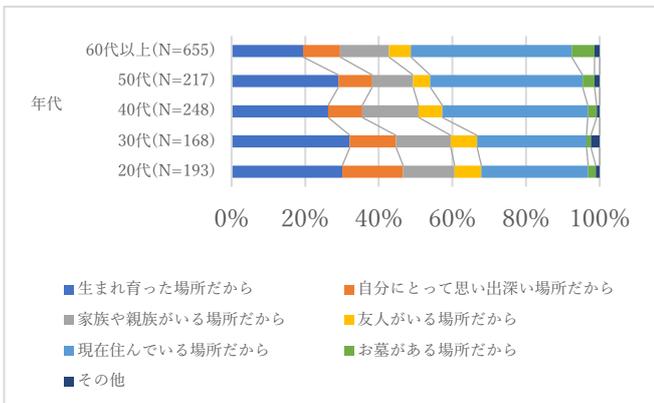


図-4 年代別でみるその地域を選んだ要因（複数回答あり）

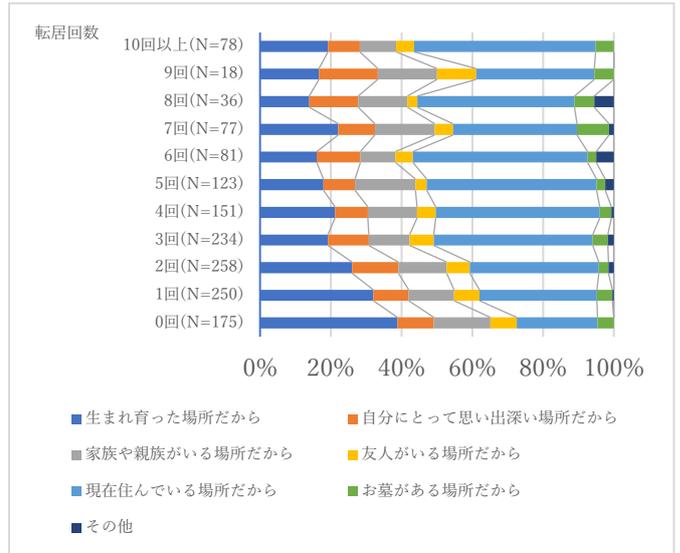


図-5 転居回数別でみるその地域を選んだ要因（複数回答あり）

4. 結論

本研究では、相手の情報に左右されない人々の自己の意識における地域を把握するための調査アンケートを行い、以下の点が明らかになった。

- ・市区町村レベルの広がり度で自己の意識における地域を捉えている人が多く、居住年数が増えるにつれその割合は増えていく傾向にある。
- ・人々は自己の意識における地域を選択する要因として「現在住んでいる場所」「生まれ育った場所」を選択する傾向がある。その中で、転居回数が増えていくにつれ「現在住んでいる場所」を選ぶ傾向が多くみられる。

今後の課題としては、調査アンケートで自己の意識における地域を「あなたのことを最もよく表す地域」として質問をしていたが、少し分かりにくい表現だったと考えられるため、分かりやすい表現を再度検討することが課題である。

参考文献

- 1) 関口達也・林直樹・寺田悠希：人々の「地元」に対する概念的・空間的認識の多様性-地域のみちづくりへの活用に向けた定量的解析-, 農村計画学誌 vol.35 2017年12月
- 2) NTTアド：地元意識の把握に関する調査 2015年9月15日
<https://www.ntt-ad.co.jp/news/20150914/20150914.pdf>